EVENT REPORT

地域の枠を超えたこれからのまちづくりとは。《前編》

わたしたちのまちづくりサミット —BEYOND LOCAL—を秋田県男鹿市で開催

人口減少が進む日本では、特に東京をはじめとする大都市以外の地域での人不足・リソース不足が深刻になりつつあります。そんな時代だからこそ、各地域が手を取り合い、双方向で活性化していくことが必要不可欠ではないか—。今回おこなわれたイベントの大きなテーマです。

会場となった秋田県は、人口減少率が日本トップ。なかでも、男鹿市は県内で三番目に減少率が高いエリアです。この男鹿市に、地域内外からさまざまなプレイヤーが集結し、まちづくりに関する各地域のチャレンジやアイデアを共有・発信する場が設けられました。地域を跨いで循環させることで、各地域の魅力を活かした「これからのまちづくり」を模索する場「わたしたちのまちづくりサミット —BEYOND LOCAL—」です。

秋田県男鹿市でサケ造りの枠を超えて地域活性化を実践する株式会社稲とアガベ、農と食を通じた地域と都市の豊かな関係づくりを目指す「めぐるめぐプロジェクト」を始動した三菱地所株式会社、「まちづくり」をアイデンティティに都市・地域でプロジェクトを進める株式会社三菱地所設計の 3 社が「わたまちサミット実行委員会」を結成し、このイベントの運営を行いました。

本レポートでは、サミット当日の様子をご紹介します。

PROGRAM

（本ページにて紹介）

- ■ 稲とアガベの男鹿まち歩き（限定プログラム）
- ■ わたしたちのまちづくりサミット　オープニングトーク
- ■ 基調講演｜村岡 浩司 氏「 ″世界があこがれる九州をつくる″ を掲げる九州アイランドプロジェクト」
- ■ 基調講演｜岡住 修兵 氏「男鹿の未来をつくる ″男鹿酒シティ構想″ 」

（《後編》にて紹介）

- ■ わたまちピッチ＆トークセッション
- ■ 基調講演｜東海林 諭宣 氏「ヤマキウ南倉庫をはじめとするエリアリノベーション」
- ■ おがまちトーク
- ■ クロージングトーク

稲とアガベの男鹿まち歩き

サミット開始前、参加者15名の限定プログラムとして、「稲とアガベ」代表の岡住修兵さんが案内するまち歩きを実施しました。

岡住さんの案内で稲とアガベの醸造所を見学

まずは、稲とアガベの案内から。

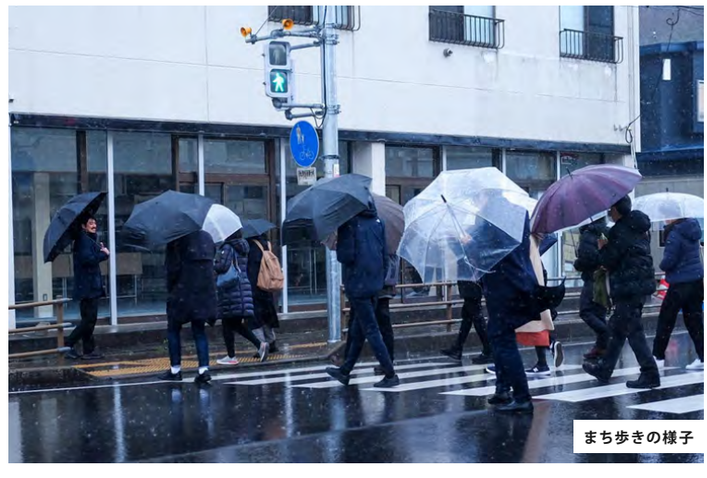
稲とアガベは、男鹿市で2021年に創業した「クラフトサケ」の醸造所。「クラフトサケ」は日本酒の製造技術をベースにし、副原料を加えることで生まれた新ジャンルのお酒です。例えば、ビールのようにホップを入れてみたり、ブドウを入れてフルーティーな味わいにしたり。りんごを入れて、日本酒とシードルの“良いとこ取り”のようなお酒をつくることもできるそうです。

「このまちをお酒のまちにしたいんです」

まち歩きの冒頭で、稲とアガベの岡住さんが話ったのは“男鹿酒シティ構想”。
そう語る背景には、男鹿市の人口減少課題がありました。

「今のまま人口減少が進めば、僕が生きているうちに男鹿はなくなると思います。このまちが未来に続くために動きたい。『男鹿＝酒のまち』という認知がされれば、後世もこのまちが存在し続けてくれるんじゃないかと」

福岡県出身の岡住さんですが、以前働いていた酒蔵がある秋田県に恩返しをするために男鹿市で起業しました。人口が減っていくまちを、酒というツールで盛り上げようと活動しています。



まち歩きの様子

その盛り上げ方は、醸造所でクラフトサケをつくることに留まりません。レストランや宿の計画など「稲とアガベがあるから、男鹿に行こう」と思ってもらえるようなまちづくりを進めています。

まち歩きでも、次々に「この空き家はこれから変わっていく」と紹介する岡住さん。稲とアガベ醸造所の目の前の空き家では、ラーメン屋を始めるそうです。岡住さんの夢に共感した博多一風堂が監修に入り、開店準備を進めています（2023年8月オープン）。

また、2023年3月末に稲とアガベが新たにつくった食品加工所も、もともと空き家だった場所。お酒づくりをする中で生まれる酒粕を使った「発酵マヨ」を製造・販売する場所です。その他にも、地元の有志の方が集まってできたカフェが開設したり、それがきっかけで若者が集い起業するなどのチャレンジが生まれているそうです。また、2018年に男鹿駅が旧駅舎の至近に新築・移設されたことがきっかけで、男鹿市が旧駅舎周辺の土地を買い取り、駅前広場としてどんどん整備を進めています。地域内外の多くの人が関わりながら、まちに新しい命が吹き込まれています。

「このまちのシャッターを開けたい」と話す岡住さんに連れられた、稲とアガベからサミット会場までの道のり。徒歩10分程度の範囲でもまちが変わっていく様子が感じられ、参加者一同ワクワクしました。

まち歩き後は、サミット参加者有志の昼食交流会を行いました

オープニングトーク

サミットのスタートは、サミット実行委員長の岡住さん、企画を行った三菱地所の広瀬拓哉さん、事務局を務めた三菱地所設計の三好史晃さんのオープニングトークから。 3人が今回の企画を男鹿で始めた理由を語ります。

左から広瀬さん（三菱地所）、三好さん（三菱地所設計）、岡住さん（稲とアガベ）

広瀬　「私が所属する三菱地所で、食と農をテーマにしたコミュニティ『めぐるめくプロジェクト』の取り組みを行うなか、『地域内で完結させるのではなく、いろいろなプレイヤーが入り混じることが地域活性化につながるのではないか』と考えていました。岡住さんと出会い、地域における食とまちづくりの接点を考えていくうちに、今回のサミットの構想が生まれました」

三好　「三菱地所設計は、建物を企画・設計するのがメインの仕事です。その根底にはつねに“まちづくり”という大きな考え方があります。建物をつくりながら、目指しているところはコミュニティを生むことなんです」

これは、三好さんが男鹿市にくる前に、オンラインで岡住さんから聞いた話を元に描いた男鹿のまちの絵です。まちの話を聞く中で、たくさんの魅力がつまっている男鹿でいろいろなコトが起こり始めていると感じ、そのまちの今と未来を絵に描くとまちの楽しさを共有できるものになるのでは、という想いで描いたそう。オープニングトークで三好さんは「この絵に描かれているよりも、もっともっと広がりのある男鹿のまちを見つけていきたい」と話しました。

オープニングトークの最後には、男鹿市長にもご挨拶をいただきました。

男鹿市長　菅原広二さん

菅原市長　「私は71年間、男鹿市に住み続けていますが、こんなにいいところはないです。素晴らしい景観、漁れる140種類以上の魚、なまはげの伝統文化。人口が減少していても、男鹿はいいところだとみんな思っているんです」

「今、男鹿にはいい風が吹いています。ひとつは洋上風力発電です。秋田県は日本の洋上風力がスタートした地。世界の脱炭素に貢献したいという思いがあります。**もうひとつは利他の風です。岡住くんを初め、若い人たちがなんとか地域を活性化したいという思いを持って語ってくれています。利他の心を持った若者たちが来てくれて非常に嬉しいです**。今までの概念にこだわらずにチャレンジするところに私は感心しています。だから、みんなで支援していきたい。新しい文化をつくっていくことが秋田県を変えて、日本を変えていく。みなさん、今日は一緒に盛り上げていきましょう！」

———

市長の熱い思いが会場にも伝わり、いよいよサミット本編が始まりました。３つの基調講演と２つのトークセッションを、それぞれ抜粋してお伝えしていきます。

基調講演：
“世界があこがれる九州をつくる” を掲げる九州アイランドプロジェクト
村岡 浩司 氏

九州全域で飲食店を展開する一平ホールディングスの村岡さんは「何かやれることはないかと足掻いてきた３年間の記憶を皆さんにお届けします」と、コロナ禍からの再生を赤裸々に語りました。

村岡　「コロナ禍でドーンと売上が下がってしまった中、時間だけはありますから、散歩しながらずっと何かできないか考えていました。そこでひらめいたのは、**『宮崎だけではできないけど、九州全域をつなぎ合わせればできることがある』**ということ。例えば、宮崎県は小麦をつくっていませ

んが、九州全体を見ると日本の3割くらいの小麦をつくっています。注目されていない商品も、みんなで力を合わせてプロモーションしていくなど、広域経済圏で括るという発想は今までありませんでした。その結果、九州一帯でいくつもの新商品が生まれ、成功していったんです」

「新たな価値軸として、このまちしかできないことを『スーパーローカル』と僕らは呼んでいます。ローカルは場所の話じゃなくて、人や体験や、みんながまちの中で誇りに思っているものとか、そこでしか味わえないものとか、そういう意味です。**『地方』『田舎』といえば途端に社会課題だけが目につきます。そうではなくて、価値に目を向けること。**『めぐるめくプロジェクト』のご縁で宮崎の端っこからここに来て、みなさんとつながることができ、おもしろい時代の流れを感じています」

基調講演：
男鹿の未来をつくる"男鹿酒シティ構想"
岡住 修兵 氏

岡住さんは「このプレゼンを通して、仲間集めがしたい」と話し始めました。

岡住　「僕は福岡県出身で、２０１４年に秋田市の蔵元・新政酒造株式会社で働き始めたことをきっかけに秋田県に引っ越してきました。『なんで秋田出身じゃないのに、こんなに頑張ってやっているの』とよく聞かれますが、僕は秋田に恩義を感じているんです。秋田に来る前は精神的にボロボロで。けれど一念発起して、何か秋田にあるかもしれないと思って来たんです。新政酒造の人に支えてもらい、秋田の人たちに手を繋いでもらい、引っ張り上げてもらって、僕は今、生きているんですよね。真剣に“秋田の人に生かされている”という感覚があります。**僕はこの秋田に恩返しがしたいんです。その方法として、まちに仕事をつくりたい。**そう言っていたら、本当に多くの方が手伝いをしてくれています。お酒を通して来てくれた人に**『あなたの力が必要なので、人生のうち１％の力を使ってくれませんか』と聞くと、大体みんな１０％くらい使ってくれるんです**」

「実は、２０２３年3月２２日の『男鹿市の日』に、まちづくりの会社をつくります。この後登壇いただく石田さんと、稲とアガベ CFOの斉藤さんと、僕とで。お酒以外の新たなコンテンツとして、鵜ノ崎海岸のリブランディングをやっていきたいと思っています。このプレゼンを聞いて何か一緒にできそうだと思う方がいれば、ぜひお声がけください」

———

続きはこちら！

▶ＮＥＸＴ
地域の枠を超えたこれからのまちづくりとは。《後編》
わたしたちのまちづくりサミット ―BEYOND LOCAL―を秋田県男鹿市で開催